

『キャスト・アウェイ』

2000 年／アメリカ／ロバート・ゼメキス監督作品

「漂流時のバイブル映画」の 滑稽な名シーン

会員 沖田 初花 (77 期)

「悲しい」という気持ちをここまでシンプルに表現した作品を私は今までに見たことがない。

主人公は、宅配会社の敏腕システム・エンジニア。世界中を駆け回り、一秒も無駄にしないことが彼の信条だった。

そんなある日、彼の乗った飛行機が事故を起こす。奇跡的に一命を取り留めたものの、彼が漂流した先は無人島だった。まったく孤立無援の環境に投げ出され、主人公は生きるために必要な水と食料、寝る場所の確保の問題に直面する。

約2時間半の作品で、その半分以上が1人で無人島で生活しているシーンであるにもかかわらず最後まで飽きずに見ることができるのは、トム・ハンクスの演技と R・ゼメキス監督のリアリティを損なわない演出によるものだろう。

孤独な無人島生活の中、いつしか主人公は一緒に島に流れ着いたハンドボールに自分の血で顔を書き、「ウィルソン」と名前を付けて話しかけるようになった。そして、4年もたったある嵐の日に、ウィルソンは海に流れてしまった。主人公は激しい雨の中、必死に泳いでウィルソンを取り戻そうとするが、自身の身の危険を感じ、ついに取り戻すことをあきらめる。「ウィルソン、ごめん。ほんとうにごめん」そう言って主人公は大泣きし、唯一の友を失ったことで生きる気力を失ってしまう。

確かに、いくら心の拠り所にしていても、たかがボールのために自分の命を危険にさらし、大泣きするなんて滑稽だ。それでも、彼の全身から溢れる悲しさが画面越しに伝わってきて、つられてこっちまで切なく泣きそうになる。彼の感じている「悲しさ」の純度の

高さに、美しいとさえ感じる。なぜこのシーンにここまで引き込まれるのか。それはきっと、ただ悲しいという気持ちで泣いた幼い頃の自分に主人公を重ねることができるからではないかと思う。

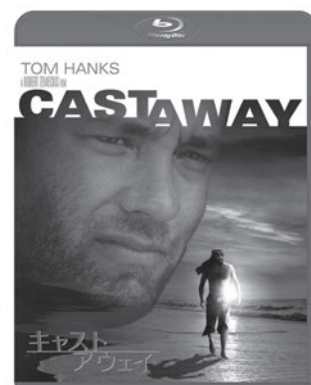
誰しもが幼い頃には、正しい理由とは関係なく自分の感情に任せて泣いた経験があるだろう。しかし、大人になるにつれ、いつしか我々の行動には理由があることが当たり前になっている。

それは決して悪いことではないが、理屈の後に感情に名前を付けることに慣れすぎではないか。理屈うんぬんではなく、その感情をそのまま肯定し、受け入れることに抵抗がありすぎるのではないか。

ヒトとそれ以外の動物の違いのひとつは、思考、判断、言語など理性的な部分を担う大脳新皮質が進化しているか否かであるらしい。その内側にある大脳辺縁系はヒト以外の哺乳類の大脳の大部分を占めていて、感情、意欲、本能を司り、自律神経系の中樞が存在する。

場所を選ばず喜怒哀楽を表すサルとは異なり、ヒトが時と場合を考えて感情を表現できるのが大脳新皮質のおかげだとしたら、我々は社会生活のほとんどにおいて大脳新皮質を使いまくっているに違いない。大脳辺縁系と大脳新皮質というふたつの脳が互いに影響を及ぼし合いながらメンタルヘルスを維持している以上、現代における社会生活を送る上でも、大脳辺縁系が哺乳類において担ってきた役割を軽視しすぎずに、そのバランスを保つ必要があるだろう。

人間がいない場所で逆に人間性を取り戻していく主人公の姿を通して、感情をそのまま受け入れることの豊かさを思い出させてくれる名作である。



『キャスト・アウェイ』
Blu-ray: 2,075 円 (税込)
DVD: 1,572 円 (税込)
発売・販売元: 株式会社ハピネット
メディアマーケティング
TM & (c) 2000 DreamWorks
LLC and Twentieth Century
Fox Film Corporation. All
Rights Reserved. TM & (c)
2012 DW Studios L.L.C.. All
Rights Reserved.